
大帝国の悲願、ハルケギニアを蹂躪せよ

神風大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大帝国の悲願、ハルケギニアを蹂躪せよ

【Nコード】

N4525T

【作者名】

神風大和

【あらすじ】

神聖フィリス帝国

明朝一人の男が祖国を飛び立った。

彼は祖国の悲願、そして愛する女性を救うために戦う。

相対するものは全てなぎ払う、一切の慈悲もなくなただ一つの救いなし。

そして来るべき日に向けて超大国は動き出す。

第一話大帝国（前書き）

やっちゃった。

後悔はしていない（キリ

第一話大帝国

カツ、カツ、カツ！

一定のリズムを崩すことなく一糸乱れぬ何千何万もの軍靴が愛する祖国を凱歌する。

その背に背負う物は逆十字と双剣の国家と愛する者達。

ありとあらゆる鋼鉄の獣と空飛ぶ剣。

その姿は正しく軍隊。

その顕現は正しく最強。

「我らが祖国万歳！我らが皇帝陛下万歳！」

皆が皆。各々が思う物、信ずる正義の元に集い形成された国家。人々はそれを超大国神聖フィーリス帝国と呼んだ。

「皆、良く集まってくれた。これより我らが帝国の悲願が達成されるであろう」

一人、異様なまで豪華に着飾った壮年の男性が円卓の上座でその口を開いた。

周りに集うはどれも帝国最重要人物達。

ある者は老人、ある者は中年、ある者は若者。

されどその瞳に宿す熱意は誰の目にも明らかに宿っていた。

「はい。皇帝陛下。我らはこの時を永劫の刻より待ち侘びておりました」

その中の一人。皇帝と呼ばれた男の隣。円卓に座っているどの人物よりも飛び抜けて異才を放つ若輩がいた。

「うむ。ではこれより第五計画案を提案する。異論があるものは拳

手をせよ」

皇帝は周りを見渡す。

手を上げようとする者は誰一人としていなかった。

「……………よし。これより24時間以内に各自行動を開始。アーサー良いな？」

皇帝の冷貌が異才を放っていた若者、アーサーを貫く。

されどアーサーは微塵も怯える姿も見せず。

「了解致しました。皇帝陛下。我らが祖国に掛けて必ずや」

この男こそ——帝国始まって以来の天才を超えた天才。そして鬼才すらも生温いと称えられた男。

神の化身——アーサー・フォン・ドラゴ・フィリス

瞳に宿す物はどの世界よりも冷酷な未来であった。

第一話大帝国（後書き）

フィリス帝国、地理的にいえば北米南米全土を納めている超大国

第二話祖国の別れ（前書き）

寝ぼけながら書いた第二話
御指摘があれば修正いたします。

第二話祖国の別れ

「行ってしまうんですね。アーサー」

しばし、悲しげに表情を沈ませた白銀の髪、紅い瞳を持つ絶世の美女と評されても間違いない女性。

「ああ、行かなければならない。この帝国のため、そしてなによりセフィーの為にな」

アーサーが柔らかく微笑みかけるとセフィーの真っ白な肌が朱に染まり、それと同時に目尻にじわじわと涙が浮かぶ。

「泣くな。何も死に行くわけではない。これが終われば直ぐに帰ってくる。そしたら・・・そうだな。結婚しよう」

セフィーを抱き抱えながら、にやりと意地悪気に微笑むアーサーにセフィーもつられてくすりと笑った。

「はい。心よりお待ちしておりますわ。愛するアーサー」

先ほどまでの名残として目を潤ませ真っ白な頬を桜色に染め上げて背が高いアーサーを見上げる形として見つめるセフィー。

思わず目を見開いてしまった。

ああ、自分はこの女性に本当に恋をしているんだなど。

しかし、時間は有限。

そしてこの至福の時間も終わりを告げる。

「アーサー皇子。準備が整いました。どうぞこちらへ」

黒衣の軍服に顔半分を鬼の仮面によって覆い隠された将官がアーサーを呼び寄せる。

「ああ、では行こうか。また会おう。愛するセフィー」

その言葉を最後に一頭の黒竜がまだ登りきらない太陽を背に飛び立った。

目指すはトリステイン。トリステイン魔法学院。

時刻は昼前——ここトリスティン魔法学院に一頭の黒竜が降り立った。

黒竜はこれまでの竜よりも一回り大きく他の追隨を許さないほど威圧的で神秘的であった。

「ありがとう。ジル。快適な時間だった」

青年は竜の背中から降り立つと頭を垂れる黒竜の頭を撫でた。

撫で終わったの合図として頭を二回ぽんぽんと叩く。

ジルは名残惜しそうにグウと無き巨大な翼を大空へと羽ばたかせる。

黒竜が消え入るまでその方向を眺めていたアーサーはようやく周りの視線に気づいた。

そしてアーサーは類まれなる洞察力でその視線に込められている感情を読み計った。

驚愕、羨望、感心、嫉妬、妬み

驚きが大半を占められていてその次が嫉妬や憎悪といった感情。そして少ないが羨望や感心。

はあ、溜息を一つ吐くとアーサーは自分によってくる侍従に気付く。

「あ、あの。お荷物をお持ちいたします」

「ああ、いや良い。荷物は自分で持つ。それよりも部屋へ案内してくれないか？ここじゃ視線が痛い」

荷物を持たず持たせないで少々渋った侍従であったが、周りの視線に気づいたのか最後には渋々といった感じで部屋を案内してくれた。

案内された部屋はVIPルーム並みの広さであった。

他の部屋よりも確実に広い。

それもそのはずだろう。アーサーは一国の第一皇子。

優遇されないはずが無かった（最初は拒否されたが、脅しを混ぜたら折れてくれた）

「では、私は失礼しますね」

一礼して立ち去ろうとする侍従にアーサーが待ったの声を掛ける。
「すまないが、名前を覚えてくれないか？いつまでも侍従じゃ呼びにくい」

「あ、はい。私の名前はシエスタです」

「そうか。ではよろしくな、シエスタ」

そう言って笑いかけるアーサーにシエスタは一瞬惚けると慌てて取り繕い「こ、こちらこそ、よろしく願います」と言って早々に立ち去ってしまった。

アーサーはシエスタの行動にクエスチョンマークを頭に浮かべながらも荷物が入ったトランクケースを開く。

その中から一冊のノートを取り出し筆を走らせる。

やがて筆が止まると同時に文字が淡く燃え上がった。

文字が最後の一字まで消え入るのを確認してからノートを閉じて机の中に仕舞う。

「さて、集合まで約二時間後。久しぶりにあの老いばれに会いに行くか」

金に黒みがかった髪を摩かせ瞳は双黒、何が合っても無を徹するその端正な表情は彼が愛した者にしか動かせない。

そして、部屋を出ていく時。その顔に張り付いた表情。

もしこの時他の誰かが、彼に出会っていたならば恐らくこう叫ぶだろう。

悪魔が現れた――と。

第三話無知無能（前書き）

御指摘、感想、評価お待ちしております。

第三話無知無能

逆十字と双剣が描かれた純白のマントを靡かせ、180cmほどの身長でされど筋肉隆々してはなくスラリとした細身の中に洗礼された強さを秘めた男がとある扉の前で立ち止まっていた。

「ここか・・・・・・まったく変わってないな」

まったく変わることのない装飾に内心苦笑しつつも扉に向かいノックを数回繰り返す。

しばらくすると重厚な音をたてながら扉が開かれた。

「どうぞ」

最初に出て来たのは緑色の髪に豊満な胸を持った妙齡の美女。心なしかその顔は微妙に引き攣って見える。

「ああ、久しぶりだな。ロングビル」

「お久しぶりですわ。アーサー皇子」

たがいには視線を交わし合わせる二人。

しばらく目を合わせたままだったが、先に折れたのはロングビルだった。

「・・・どうぞ、こちらへ」

中へ案内されるとそこには白髪の老人が佇んでいた。

「ほっほ。お久しぶりですのう。して今日は何ようで来られたのですかな？」

この学院の校長オールド・オスマン

何百年も生きていると評される彼であってもアーサーには気後れしていた。

それもそのはずだろう。

彼と老人の初対面はまさしく最悪であったのだから。

季節は遡り去年の夏

生徒達、教師、使用人達は皆、自分達の実家へと帰省しており人が一番少なくなる時期。

そこに漆黒の集団が降り立った。

一人として余すことなく顔半分下を鬼の仮面で隠し、肩に最新式の銃装を掛け、腰に長剣と過剰ともいえる完全武装。

それらに囲まれながら歩く純白の礼装に身を包んだ青年。

彼らは正しく異常だった。

誰一人としてその場の景観に合わず、むしろ拒絶している。

「殿下。此方にございます」

漆黒の軍服に身を包んだ男が前に出て道を案内する。

学院内は広くもし案内役がいなければ確実に迷ってしまうだろう。暫く歩いた後、今日来た理由となる部屋へとたどり着いた。

入口には女性が佇んでおりこちらに気付くと一礼して近寄ってきた。

「お待ちしておりました。どうぞ中へ」

一応促されて入ってみたが漆黒の集団の表情は皆一様に冷ややかなものだった。

まず第一に侍従すら出迎えに寄越さず、ここまで歩いてきたのだ。そして今イスに偉そうに座っている老人を見た瞬間、漆黒の集団基アーサー達の温度は急激に急降下を始めこの僅か二秒間の間に両者の溝は決定的となってしまうた。

片方は未だ気付いてない様子だが。

「お初にお目にかかります。私がフィリス帝国第一皇子。アーサー・フォン・ドラゴ・フィリスと申します。以後お見知り置きを」
「ほつ。これはご丁寧に。わしはオスマンじゃ。みなからはオールド・オスマンと呼ばれておる」

自己紹介は何事もなく終わりを告げ交渉も最終段階に入った。

「我々が提示する条件はこの学院内での最優の待遇、そして数人の護衛です」

オスマンは護衛の件に関しては了承したが、最優の待遇については断固拒否していた。

曰く生徒を差別してはいけならしい。

これを聞いたアーサーの護衛達は必死で笑いを堪えていた。

このトリステインは最も差別が激しい国として知られている。

国民をゴミ扱い、貴族の暴走、それを抑えるはずの王の空位。

帝国の調べではあと数年後には確実に滅びると予測されている。

そしてその根源足る貴族を育てている学園の長から差別はいけな
いと言われるとは思ってもよらなかったからだ。

ぶっちゃけるとアーサーは普通の部屋でも良かったが皇子としての格がそれを許さない。

それにこのオスマンという人物は先ほどから自分達の足元を見る
ような言動が目立ってきている。

所詮異国の田舎国家ぐらいにしか思っていないのだろう。

まあそれも無理はない。

この数千年の間、彼らは進化を止め停滞を選び碌な世界進出をし
ようとはしなかった。

案外すぐ傍に存在してある超大国フィリス帝国にすら気付かなか
ったのだ。

そして誇りだけに塗れた者達。

自分達が知らない存在がもしかしたら自分達より大きな力を持っ
ていると思わないのだろうか。

故に下に見る、それが命取りになるとは知らずに。

「埒が明きませんね。オールド・オスマン」

「それはこつちの台詞じゃのう。そちらが引けば良かるうに」

「貴様！！」

露骨な溜息と嫌味を吐くオスマンに護衛隊の新任してきた兵士が
激怒し、銃を構える。

「止める!!」

アーサーが無表情のまま一喝する。

それに固まる護衛達とオスマン達。

すつ、とアーサーが座ったまま窓の方を指さす。オスマン達が指さす方を見ると同時に強固な（・）固定化の魔法を掛けられた壁が砂のように脆く崩れ去った。

啞然とするオスマン達を余所にアーサーは無言で立ちあがり破壊され、空が良く見えるようになった壁のほうへ移動した。

「オールド・オスマン。どうか覚悟して戴きたい。我々と相對すると言う事を。我々を見下すという行為を。我々に齒向かう恐ろしさを」

さらに言葉を紡ぎだすアーサー。

しかしオスマンとロングビルの目は空一点に釘づけになっていた。突如現れた空を覆い尽くさんばかりの黒と白の大艦隊。

「我らはフィリス帝国。敵対するもの全てを薙ぎ払い、ただの一つも容赦はしない。さてオールド・オスマン。先ほどの答えはyesでよろしいかな？」

有無を言わさぬアーサーの物言い、そしてなんといっても彼自身が発している覇気と殺気。オールド・オスマンはここにきてようやく自分の置かれている立場を理解したようだ。

顔は青ざめ腰を抜かしている。

「アーサー殿。この通りじゃ。お主の最優遇は保証する。そして護衛も。だからどうかあの軍隊を鎮めてくれ」

オスマンは跪き、アーサーに対して頭を垂れた。

それはこの時代において最も忠誠を表す態度。

アーサーはコクリと頷くと思いき口を開いた。

「全軍撤収！祖国へ帰るぞ！」

「ハッ！」「」

一列に整列して敬礼する護衛団。

そして此度の遠征軍を率いた最高司令官アーサー・フォン・ドラ

ゴ・フィリスは最後に未だ跪いているオスマンを一瞥する。

「オスマン。また会いましょう」

それだけ言いアーサーは去って行った。

残されたオスマンは心に誓った。

絶対に彼らには逆らってはならないと。

（今思えばあの時ほど下らない茶番は存在しないな）

アーサーは思わず苦笑した。あの時率いた艦隊は2個師団級。

トリステインなど赤子の手を捻るように軽く滅ぼせるほどの勢力だ。

それならばなぜあの時滅ぼさなかったのか。それは単純明快。ただの興味本位だったからにすぎない。

本当にそれだけだ。だが、もしあの時オスマンが跪いていなければ確実に滅ぼしていたかもしれないが。

「ほっほっほ。あれも今じゃ良い思い出じゃよ」

額に浮かんだ汗を拭いロングビルが淹れたお茶を飲むオスマン。

あの後、幾度かオスマンの所を訪れた（戦艦は連れてきていない）アーサーはそれなりに友好関係を築き上げていた。

「とっ、もうこんな時間か。それじゃあ、世話になったな。また来るよ」

「またのうー」

声が嬉しそうに上ずっていたのはきつと気のせいだろう。

入口にはロングビルが控えており扉を開けてくれた。

「気が利くな、ロングビル」

「これが仕事ですから」

しかし、アーサーは不気味に唇を突き上げ。

「ティファニアは元気にしているかな？」

ロングビルの耳元で静かにそれだけ告げて来た道に戻って行った。後に立ち竦んでいたロングビルの表情には困惑、驚愕、怒り、不安。

様々な感情が入り乱れていた。

第三話無知無能（後書き）

思ったんだけどゼロの使い魔のジャスティスってデフィしかないのでは？

・・・・・・というわけで頑張ります！！

第四話怪しい人影（前書き）

またしても寝ぼけながら書いた一品。
御指摘、感想、評価よろしく願います。

第四話怪しい人影

オスマンと別れたアーサーは入学式が行われる食堂へ一直線に向かっていた。

途中貴族達が傲慢大会を開いていたが、自分には関係無いことなので無視して通りすぎようとした時、妙にじつとりとした・・・まるで挑発するかのような視線を投げ掛けられる。

しかし、アーサーは最後まで振り向くような事はしなかった。

もしこの時振り向いていれば必ずいちゃもんをつけられていただろう。

現に舌打ちする声が背後から響いたのはその直後だった。

(下らんな)

アーサーの思いを余所に再び傲慢話に興じ始めた貴族の子弟達を背にこれから始まる学園生活にそつと溜め息を吐いた。

食堂に着いたアーサーは長い入学式を何事も無く終え、今は一人夕食を食べていた。

周りは友好関係を広げべく躍起になっているのに対し一人静かに料理を食べるその姿は王族にも勝る品があり、また騎士が良く似合いそうな顔や仕草、何れをとっても一級品だった。

そんな彼に声を掛けようとする人はそれこそ何百人単位でいた。だが互いに牽制し合う事により中々彼に声を掛けようとする猛者は現れず結果として彼の周りに空白をもたらしていた。

当のアーサーは別段気にした様子はなく、むしろ今の状況を歓迎しているようにも受け取れる。

そこに近づく影一つ。

この世界では一般的な金髪にアーサーには及ばないものの平均よりはるかにカッコいい部類に入る青年。

「やあ、こんばんは。僕の名前はドルス・レイ・アルフォン。君は？」

アルフォン……聞きおぼえがある名前にアーサーが反応する。

確か10年前まで没落寸前の伯爵家だったが、ここ最近では大幅に持ち直しトリステインにおいては一番の経済力を誇っているとの噂だ。

もう一度、ドルスを見直す。

見た目は確かに優秀そうだが所詮、優秀止まり。カリスマ性に溢れている訳ではないし何より凡人差が目立つ。

（では、何故それほどまで領地を発展出来た？……要注意だな）

ここまでの思考、現実時間に換算すると0.1秒にも満たない。

たったそれだけの短時間でアーサーはこの男の本質を見抜こうとしていた。

「……私はアーサー・フォン・ロード」

アーサーは外国の貴族として留学している事になっていた。

実際それほど変わりはない。ただそれが皇族か貴族かの違いなのだから。

「ロード？聞いたことが無いな」

「ああ、外国から留学してきたんだ。……この大陸とは別のね」

一瞬——ドルスの表情が驚愕に染まったのをアーサーは見逃さなかった。

「そ、そうか。出来ればその国の事色々話してくれないか？少しばかり興味が出た」

「別に構わないが……」

そして理解した。

この男は単なる興味本位で聞いてきているのでは無い。明らかに此方の情報を探ろうとしてきている。

しかし、相手が悪かった。

アーサーは鬼才すらも生温いと評された神童。

情報の大切さは理解しているし、簡単に情報というハンディを失うつもりはこれっぽっちもない。

それにアーサーは情報を逆に引き出させる点においても天才であった。

この勝負はすでに見えていた。

第四話怪しい人影（後書き）

まあ、皆様予想通り彼の正体はあれですよ。
次回はアーサー無双です。

第五話初めてのイレギュラー（前書き）

感想、評価ありがとうございます！

これからも頑張らせていただきます（笑）

第五話初めてのイレギュラー

あのドルスという少年に合ってから数日。
アーサーは彼の正体に近づきつつあった。
いや、はつきりいえば正体は掴んでいる。
しかし……

（そんなことあり得るのか？）
時刻は丑三つ時、一人自室でワインを飲みながらじつくりと考える。
に耽る。

彼に対する情報は多方面に渡り集めた。
それこそ遠く離れた国からトリステインの貴族、平民、そして彼の近辺と最も親しい者達の部屋に仕掛けた盗聴器に至るまでだ。

情報によれば彼の領地は非常に治安が良く経済も潤いまた軍備も精強。ドルスは水のスクフェアとしても有名でありヴァリエール公爵家のカトレア嬢を不治の病から直したとされている。

カトレア嬢とはその事が切っ掛けで婚約するに至りまた今年入学共に入学した公爵家三女との関係も良好。

（まるで夢物語の大貴族だな）

その所までは素直に彼の手腕を称賛した。

没落寸前の貴族を立て直すことは生半可な労力では不可能だろう。
「そう——それがこの時代に生きて来たものならば……」

結論から言おう……

彼は転生者と呼ばれる存在だった。

いや、普段のアーサーならば下らない事として一蹴していただろう。
う。

しかし、それでも言わなければ彼の行動、言動と一致しない。

何故ならばドルスは一人になった時「あんなヤツ原作にいたか？」
「くっそせつかくぜ口魔の世界に転生して憧れのカトレアと婚約したのにこんな所でイレギュラーかよ」などなど所々意味不明な言動

も目立つが、ドルスは確かに自分の事を転生者と連呼していた。

これらの事を踏まえてドルスの事を転生者と位置付けるが、実は転生者と呼ばれる者は他に数人いた。それも皆この学院内に在学している。

一人はクリフト・アズ・メンスール子爵、もう一人はセイリ・ラ・フォンデット侯爵。

二つともそれなりに大きい貴族だ。

一人だけならまだしも他に二人もいたならば少し厄介な事になる。

「とりあえず、本国に通達。出来るならば暗殺の許可を。彼らは完全なる部外者だ」
イレギュラー

机の引き出しから出したノートにサラサラと必要事項を書きこのハルケギニアには無い文字体系の呪文を唱える。

すると文字は淡く燃え始め次の瞬間には後かたも無く消えていた。

「さて、吉とでるか凶と出るか。私としては部外者には御退場願いたいな」
イレギュラー

ワインと同じ紅色をした月を無表情で眺めながらその眼には確かな狂気が満ちていた。

それより二日後ドルス・レイ・アルフォンの暗殺許可が下った。

最強の騎士に対峙する三匹の子豚。

炙られ煮られ捌かれる。

肉塊が浮かぶ中。

騎士は血に濡れた手で語った。

何だこんなものか、と

第五話初めてのイレギュラー（後書き）

あばばば

次！次無双します！

これでたくさんのフラグが出来るね！

あー、早く使い魔召喚したい。

第六話視線の先（前書き）

なんか文章がおかしい。

あとすみません、戦闘は次回です。

第六話視線の先

入学式が開かれた時、俺は彼に出会った。

最初はあまり気にしていなかったが、食事（立食）の時に明らかに他の奴らとは違う雰囲気思わず目を見張った。

本人は隠そうとしているのか分からないが、所々の所作から品の良さが滲み出ている。

（だが、あんな奴、原作にはいなかったはずだ）

改めて自分の知識と照らし合わせてみたが、なんと確認しても彼という者は存在していなかった。

つまり彼も自分達と同じ転生者という事だろうか？分からない。

ドルスの心は完全に混乱していた。

「声……掛けた方が良いんじゃない？」

隣で一緒に彼を観察していたセイリが静かに視線を送る。

彼女も一応転生者だ。

「そうだな。もし同郷の者ならばこっちに引き込もう」

セイリ、そして遠くで交流を広げている同郷の者クリフトはドルスを見て頷く。

ドルスは声を掛けてくる貴族達に軽く解釈しながら彼に近づく。まるで自分の勝利を確信するかのような涼しい笑顔で。

「くそっ！なんなんだアイツは！！」

ドルスは部屋に入るや否や近くにあったイスを力の限り蹴り飛ばした。

「ド、ドルス、落ち着いて」

「そうよ。ドルス」

後から入ってきたクリフトとセイリが二人がかりでドルスを宥める。

しかし、ドルスの怒りは収まらない。

「アイツは一体何者なんだ！このトリスティンでは有力貴族の俺を簡単にあしらいやがって！権力や金の話し、原作の事も仄めかしてみたが眉ひとつ動かさなかったぞ」

確かにあれは異常であつた。

まだ原作を知らない普通の貴族ならば原作の事を言われてもクエスチョンマークで終わつただろう。だが、彼は貴族ならば当然のよう反応する権力や金の話しをしても反応一つ見せず平然としていた。

もう一度言う事になるが彼は異常だ。

セイリは未だ話したこともないアーサーという東方の貴族に言い知れない恐怖を抱いた。

ドルスとクリフトはそんな事これっぽっちも考えていないのか、とりあえずアーサーに対して怒っていた。

所詮、ドルスもクリフトもただの転生者と言う事だ。

彼らは原作知識や現代知識というものが無ければ路頭に迷うであろう典型的な人柄だつた。

天才でも非凡でもない、平凡……もしかしたらそれは酷く愚かで高慢な者かもしれない。

故にセイリは彼らに対しての失望感が拭い去れなかった。

もし彼らがこの時、アーサーの危険性に少しでも気付いていればこの先起こる悲劇に一石投じる事が出来たかもしれない。

まあ、単純に言ってしまうえばこれも運命……たまたま絡み合ってしまった二本の糸という事だろう。

セイリはまだ激昂しているドルスに冷たい視線を送り、後をクリフトに任せてさっさと一人部屋から去って行った。

第六話視線の先（後書き）

うーん。

やっぱり殺しすぎると駄目ですね。

こいつはアンチにして欲しいとか要望がありましたら書きます。

第七話非凡と平凡（前書き）

やっとかけた（；O；）

御指摘、感想、評価、お待ちしております。

第七話非凡と平凡

赤黒い月が見守る中。今宵、2つの狂気が宙を舞う。
ひとつは神の気紛れで異世界に生を受けた転成者。
ひとつは過去に神を見限った一国の皇子。
それはまるで夢物語のような鮮血で満ちていた。

光が世界を照らす。

この場合、光というにはおこがましいほど弱々しい月明かり。

何時もは白い礼服を着ているアーサーだが今回は赤と黒で彩られた帝国特殊部隊御用達最高級の戦闘服を其の身に纏っていた。

それは魔法遮断、物理防御力、伸縮性、機能力が最高にまで高められた逸品。

アーサーは戦闘時には何時もこの服を愛用していた。

「さて、そろそろ時間か」

腕時計で時間帯を確認したアーサーは腰に剣を差し、颯爽とドアノブに手を掛けた。

しかし、一瞬だけ背後に気配を感じたアーサーは何の躊躇いもなく素早く腰から抜いた剣を背後に振りかぶった。目に止まらぬ速さで抜き放たれた剣は相手の首を間違いなく跳ねる筈だった。そう、筈だったのだ。目の前には空中で停滞したままの己の剣。

だが、動揺は相手の方が大きかったようだった。

その相手の事に気付いたアーサーは口元をニヤリと歪める。

「ほう、アーリー。なにようだ？」

「っ！申し訳ありません殿下。いきなり背後に立つなどと言う御無礼を。如何なる処罰にも応じる所存であります。お望みならばこの首も差し上げましょう」

アーサーとは若干違う戦闘服を身に纏い、頭を垂れる、黒髪を動きやすいように後ろで束ねた女性。

彼女は帝国からアーサーを護衛する為に態々立候補までした猛者、帝国対魔法士用特殊部隊アルバラが一人アリーナ・ザン・クロッキィ。

彼女が持つ帝国への忠誠心は凄まじく、アーサーが数少ない側近の中、信頼に値すると評価したほどだった。

アーサーが彼女の事を愛称で呼ぶことからその信頼の高さが窺える。

「いや、そんな事はどうでもよい。何用で出てきた問うている」

アーサーの眼光が鋭く光る。

彼女たち護衛は普段、緊急時以外アーサーの目の前に姿を出すことは禁じられている。

それ即ち彼女たちが絶対不可欠な影である事を表し影が消えた主は何時いかなる時も危険に晒されてしまうからだ。

故に護衛ら、それに帝国に絶対なまでの忠誠を置くアリーナまでもがそんなへまをやらかす筈がない。

だから何かしらの理由が有るのだらうとアーサーは感じていた。

アリーナは頭を下げたまま口を開く。

「では、僭越ながら意見を述べる御無礼を御許し下さい。私はアーサー殿下があのような者の相手をしてお手を汚されるのは我慢できません。どうか私に殺せと命令してください」

アーサーは半ば予想通りの回答に少々あきれ気味にアリーナを諭す。

「良いかアリー。確かにお前の気持ちは嬉しい。だが、長年使わなかった剣はいつか錆び、真の戦うべき時に折れてしまう。そうなくては元も子もないだらう？」

「ですが………」

「聞け。貴様に新たな命令を下す。私の戦いを刮目せよ。しかその目に焼き付けておけ」

「………御意に」

彼ら軍人というものは命令という言葉に絶対的な拘束を受ける。

それは帝国軍人であっても変わりはないことだ。

渋々頷いたアリーナはやがて闇に消えていった。

「さて予定より時間が過ぎてしまったな。相手に考える時間を与えるのはあまり趣味ではないが、中々どうして。ワクワクするものだな」

不気味な表情を顔に張り付けたアーサーは薄い霧を身にまといながら今度こそ扉の向こう側へと足を踏み入れた。

雑林が生い茂り、虫の音が警報のように鳴り響く中、赤黒の騎士は現れた。

表情は暗く見えないが、足取りと身のこなしからそれなりの訓練を受けた戦士と見受けられた。

「そちらから呼び寄せという随分遅かったようだな？」

綺麗な金髪を掻きわけて秀麗な片眉を吊り上げる少年に赤黒の騎士は鼻で笑う。

「くくつ、いやすまないな。少々ペットの餌付けに手間取ってしまったね」

明らかにこちらをバカにしたような対応に少年——ドルスは怒気を強めた。

「ふざけるのもいいかげんにしろよ！」

瞬間——ドルスが杖を抜き呪文を唱える。

呪文が完成され一瞬で構成された水の圧縮魔法はアーサーを確実に貫くべく殺到する。

しかし、アーサーは完全に読み切ったように華麗な体捌きで避ける。

「ほう？先に手を出してくるとは思わなかったな」

無数に殺到してくる水の鉄砲玉を避けながらドルスに殺気をぶつける。

ドルスは少しだけ怯んだ様子を見せたが再び呪文に集中する。

「精度も威力中々のものだ、それにとどき応用を見せてくる辺り手慣れているようだな」

アーサーの称賛、しかしドルスの表情は一向に晴れていなかった。

（何故、こいつはこれほどまで余裕にいられる？）

ドルスは焦っていた。

彼が自分を殺す為に動いている事など等の前から勘付いていた。だから今回の誘いも態々受けたのだ。

こちらの目標は彼を殺すこと、恐らくそれは彼も同じだろう。

お互いにイレギュラーな存在、これほど邪魔な相手もないだろう。

しかし………

本来ならば最初の一撃で全てが終わるはずだったのだ。しかしアーサーはそれを苦もなく避け今も無数に殺到していく水の圧縮魔法を避けながら喋っているのだ。

（化け物なのか！？）

魔法量でいえばドルスは虚無に次ぐレベルだと確信している。なのでこれっぽっちの魔法はあまり労力に入らないが、それでも塵も

積もれば山となる。じりじりと精神力が消耗されていく。だが、弾幕を止めることは出来なかった。ヤツは必ずその隙を見逃さず踏み込んでくる。ドルスは舌打ちし、ある異変に気付くとどんどんその表情が驚愕に染まって行く。

アーサーが一步また一步と近づいてきているのだ。

最初10mほどあった距離は急に縮められ5mほどまで接近を許していた。

そして、ドルスは覆せない状況と状況と判断すると迷いなく切り札を切った。

「やれ！クリフト、セイリ！」

すると彼のまわりに存在していた360°の土が隆起しアーサーを刺し貫かんと包囲する。

——アーサーは避けることができない。彼の両手両足には鉄で練成された楔が余すことなく地面との乖離を防いでいるからだ。

そして、何の抵抗も防御手段もとることを許されなかったアーサーに対し無数の水弾と最大限まで鋭くされた鉄の槍が今度こそその命を剃り落とさんと襲いかかる。

ズドーン

これまででひと際大きい爆音が辺り一面を支配した。これにはドルスもクリフトも勝利を確信した。

ドルスはこれまでで一番の強敵を破った戦友とともに勝利を喜ぼうと友がいる筈の後方を振りむいた。

そこには今まさに心臓を貫かれた瞬間が映し出されていた。

「な・・・え？」

ドルスの表情が再び驚愕に歪む。クリフトに至っては何が起こったか理解が追いつかないのか目だけを見開いている。

やがて力なくクリフトがゆっくり倒れ伏す。

「ふむ。まあまあ楽しめたよ。連携も抜群のようだ。ただ一つだけ忠告するべき点は魔法に頼り過ぎと言う事だ。だからこんな滑稽な隙を生み出すことになる」

アーサーはそれだけ言うに興味無さげにクリフトの首を跳ねた。
その目は徹底的な無。

無感情。

「さて、と。そろそろ終わらすか」

刹那——辺りの闇が蠢きドルスを束縛する。

「んー！？んんー！ー！」

目を口を鼻を腕を脚を足を体の全てを拘束されたドルスは足掻き、
もがき苦しむ。

「転生者だと言っただから少しは他の奴らと違うと思ったが・・・
・・期待はずれだったな」

闇に染まって逝くドルスを尻目にアーサーの体からは僅かに陽炎
が差す。

草木はその熱に耐えられることはなく凄まじい温度によって焼失
していく。

やがてそれはクリフトを包み込む。

青白い光に燃やされていく彼は一種の神聖さに満ちていた。

そこまで終えてようやくドルスの方を向くアーサー。

剣は既に腰に差しており、代わりに左手に青白い炎を燈していた。
「記憶を貰い受けるぞ」

ジュウ

アーサーの左手がドルスの脳に触れる。

侵食され、一方的な蹂躪を受ける脳は危機本能からかほとんどの
生活動を停止させる。

しばらく痙攣をおこしたドルスはやがて力なく打ちひしがれ、ク
リフトと同じ光に包まれる。

「・・・これは、これは。くくくっ、あはははははははは
は！ー！」

新たな記憶を手に入れたアーサーは何を感じとったのか笑い狂っ

ていた。

「なるほどなあ、ならば我々は完全なイレギュラーという事だろうな。なるほど。ようやくヤツが言っていた事を理解できた」

アーサーは一頻り嗤うと闇の彼方へと視線を向ける。

「なあ、貴様もそう思うだろう？」

すると林の隙間の中から現れたのはあの時、ドルスとともにいた少女名は確かセイリ・ラ・フォンデット。

「貴方は一体何者なの？」

本当の畏怖を込めた言葉にアーサーは釈然と答える。

「くくつ、貴様は原作というのを知らないようだな。それなのにこれまでの言動と行動まるでこれから起こること予期しているようだお前、未来が視えているな？」

セイリは顔を驚きで埋める。まさか自分の事を当てられるとは思わなかったという表情だ。

「やはりか。まあ、この男は気付いていなかったらしいがな」

「そう。貴方の言うとおり私は未来が視える。けど・・・貴方の未来は全く視えない」

どうやら本気で言っているようだアーサーの目が興味深そうに細められる。

「・・・どうやらそのようだな。まあ何れは貴様にも分かるさ」

そう言い切りセイリに背を向けるアーサーを彼女は疑問の言葉を口にする。

「私は殺さないの？」

「別に殺しても意味はない。このことをばらされたとしてもそれ相応の対応を取るだけだ。だが一番の理由は君に興味が出たからかな」

アーサーの体は段々と濃霧に飲まれて消えていく。セイリはただじっとその背中を見つめ何かを見出そうとしていた。

後日、ドルス・レイ・アルフォンとクリフト・アズ・メンスールの失踪が発覚すると学院を越えトリステイン自体が大騒ぎとなった。特にヴァリエール公爵とアルフォン伯爵、メンスール子爵はこの事態に激怒し学院に猛抗議するとともに犯人を血眼になって探しまくった。

しかし探せば探すほど犯人探しは難航し結局見つからずにこの事件は幕を閉じる事となった。

学院側はこの責任を取り当時当直だったコルベールを解雇、財産、爵位の没収を決定した。オスマンも当初は責任を取り止めようとしたが、何処からか圧力が掛かりそのまま止まる事になった。解雇処分が下らなかったことにオスマンは若干悔しそうにしていたという。そしてこの事件はトリステイン社会全体に大きな影を落とした。

将来最前線に立ってトリステインを支える筈だった将来有望株、ドルスとクリフトの失踪はトリステインにとって大きすぎる消失だった。

第七話非凡と平凡（後書き）

次回からはテスト期間なので少々遅れて投稿することになります。
とりあえずコルベール氏グッバイフラグでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4525t/>

大帝国の悲願、ハルケギニアを蹂躪せよ

2011年6月1日21時40分発行